多賀城市文化財調査報告書第79集
塩竈市文化財調査報告書第７集

野　田　遺　跡
矢作ヶ館跡

平成17年３月

多賀城市教育委員会
塩竈市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成14年度に受託事業として実施した野田遺跡第３次調査と矢作ヶ館跡第２次調査の成果をまとめたものである。
2．同調査は、多賀城市教育委員会と塩竈市教育委員会が主体となり、多賀城市埋蔵文化財調査センターと塩竈市教育委員会生涯学習課が担当した。
3．遺構の名称は第１次調査からの連続番号である。
4．本書中で使用した遺構の種類を示す記号は以下のとおりである。
　　ＳＩ：竪穴住居　ＳＤ：溝　ＳＫ：土壙　ＳＸ：その他の遺構
5．平面図における座標値は、過去の調査区との整合性を図るため従来の日本測地系「平面直角座標系Ｘ」を使用した。
6．発掘基準線についてはＸ＝－188,395.000、Ｙ＝15,434.000を東西・南北の基準とし、その交点から１ｍ離れるごとに東西方向はＥ01・Ｅ02・Ｅ03……、W01・W02・W03……と表示し、南北方向も同様に表示した。
7．挿図中の高さは標高値を示している。
8．土色は『新版　標準土色帖』（小山・竹原：1993）を参考にした。
9．本書は、塩竈市教育委員会生涯学習課との協議の上、多賀城市埋蔵文化財調査センターが作成した。その作業のうち、本文執筆は石川俊英、図版作成は武田健市、遺物写真撮影は村松稔がそれぞれ担当し、編集は石川が行った。また、本書作成に至る基礎的整理作業については若松啓文（平成15年３月退職）が担当し、その他の遺物整理については臨時職員の村上和恵、中村千恵子、横山佳織、遠藤友美の協力を得た。
10．調査に係る諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ．野田遺跡・矢作ヶ館跡の概要と周辺の環境 …… 1
　1．地理的・歴史的環境 …… 1
　2．これまでの調査成果 …… 3
Ⅱ．調査に至る経緯と経過 …… 5
Ⅲ．調査成果 …… 6
　1．層序 …… 6
　2．発見遺構と遺物 …… 6
　3．堆積層出土遺物 …… 23
Ⅳ．遺構の年代 …… 23
Ⅴ．まとめ …… 25

調査要項

1．調査主体　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井　茂男（～平成16年９月）
　　教育長　菊地　昭吾（平成16年10月～）
　　塩竈市教育委員会　　教育長　武山　清彦（～平成15年３月）
　　教育長　小倉　和憲（平成15年11月～）
2．調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　高倉　敏明（～平成16年３月）
　　所　長　佐藤　慶輝（平成16年４月～）
　　塩竈市教育委員会生涯学習課　　課　長　玉手　宣男（～平成15年７月）
　　課　長　本郷　友明（～平成16年３月）
　　課　長　中川　政則（平成16年４月～）
3．調査概要

遺　跡　名	所　在　地	調査面積	調　査　期　間	調　査　員
野田遺跡 （第３次調査） 矢作ヶ館跡 （第２次調査）	多賀城市留ヶ谷二丁目 25-1、27-1 塩竈市袖野田地内	900㎡	平成14年４月11日 ～ 平成14年５月14日	石川俊英・若松啓文（多賀城市） 玉手宣男・早坂信夫・伊沢章 本多裕之・阿部繭子（塩竈市）

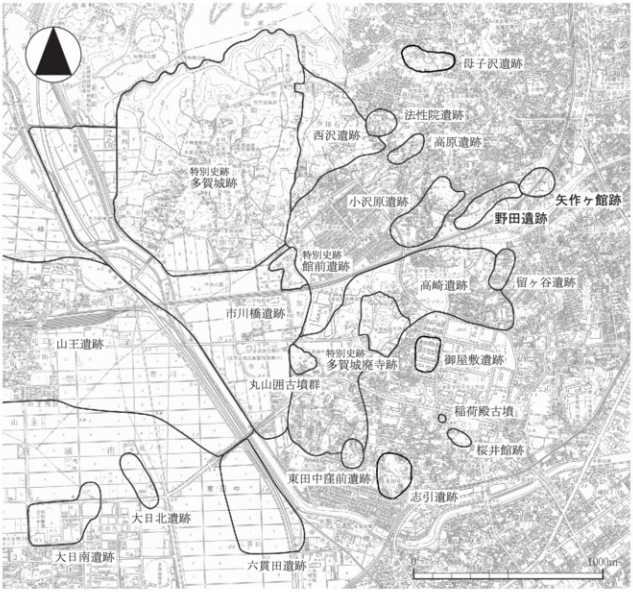
4．調査協力者　阿部　博志　　後藤　秀一　佐久間光平（宮城県教育庁文化財保護課）
　　鈴木　文雄（地権者）　㈱大和ハウス工業
　　高橋　守克（塩竈市文化財保護委員）
5．調査従事者　赤間栄二郎　　遠藤　　実　　大場　勝喜　　小野　玉乃　　南城美岐子　　橋本　　務
　　平山　節子　　福永　孝二　　真野　勝男　　渡辺ゆき子（多賀城市関係）
　　渡辺誠一郎　　井城　信広　　村上　昭弘　　菊池　有司　　本田　幹枝　　菊池　　亮
　　村上　陽子　　上総　雅裕　　引地　洋介　　安藤　　剛（塩竈市関係）
　　塩竈市シルバー人材センター（14名）

Ⅰ．野田遺跡・矢作ヶ館跡の概要と周辺の環境

１．地理的・歴史的環境

野田遺跡・矢作ヶ館跡は多賀城市留ヶ谷地区から塩竈市袖野田地区にかけて所在する遺跡である。東西に隣接しており、その広さは野田遺跡が東西400m、南北90m、矢作ヶ館跡が東西200m、南北150mに及んでいる。ＪＲ塩竈駅の南西600mの位置にあり、両遺跡の周辺は近年の宅地造成等によって急速に市街化が進んでいる。

野田遺跡・矢作ヶ館跡は北側から南側に向かって枝葉のように伸びた小起伏丘陵の一角に立地している。この丘陵は地理学的には陸前丘陵の中の松島丘陵と呼ばれるものであり、際立った突出部が少ない低丘陵である。標高は野田遺跡で10～25m、矢作ヶ館跡で８～25mである。両遺跡周辺は大小の谷が入り込んでおり、起伏の多い地形を呈している。



第１図　野田遺跡・矢作ヶ館跡と周辺の遺跡

野田遺跡・矢作ヶ館跡周辺には縄文時代から江戸時代にかけての多くの遺跡が集中している。北へ約300m離れた母子沢遺跡では古代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡が発見されている。西側の丘陵上には小沢原遺跡があり、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土器埋設遺構などが発見されている。その北側の高原遺跡では竪穴住居跡や須恵系土器が多量に廃棄された溝跡などが発見されている。法性院遺跡は古代の散布地であり、本格的な調査はまだ行われていない。その西側にある西沢遺跡は古代・中世の複合遺跡である。古代の遺構としては竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されており、竪穴住居跡の中には鍛冶工房の存在も確認されている。中世の遺構としては掘立柱建物跡や溝跡が発見されており、平場全体に建物群が検出されて館跡のような景観を呈す地点もある。西沢遺跡の西側に特別史跡多賀城跡がある。多賀城は奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれ、奈良時代には鎮守府も併せ置かれるという律令政府による東北地方経営の拠点であったところである。そのほか縄文時代の貝塚や包含層、古墳時代前期の方形周溝墓が発見された地点もあり、さらには中世の館跡や近世の神官の屋敷跡も確認されるなど各時代の遺構の存在も知られている。一方、野田遺跡・矢作ヶ館跡の南側には谷を隔てて高崎遺跡や留ヶ谷遺跡がある。高崎遺跡は多賀城の付属寺院である多賀城廃寺を取り巻くように広がっており、各地点で奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などをはじめ、土器埋設遺構や燈明皿を一括廃棄した土器捨て場跡なども発見されている。また、古墳時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡や溝跡、近世の屋敷跡なども発見されており、各時代にわたる様子が次第に明らかになってきている。

第２図　調査区位置図

2．これまでの調査成果

野田遺跡第１次調査は今回の調査区の北西約200mの地点を対象として実施した（註１）。鉤方に屈曲する溝跡と、同じく鉤形に延びる小柱穴列を発見している。詳細は不明であるが、いずれも区画施設の一部と考えられる。第２次調査は今回の調査に先立つ確認調査として実施したものである（註２）。東北本線によって切断される丘陵のうち、東側の丘陵頂部側では遺構は発見できなかったが、西側への緩斜面において掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡４軒、溝跡５条などの遺構を検出し、従来散布地とされてきた本遺跡の一端が明らかになってきた。ところで、昭和47年11月の分布調査では「中央に土壇、南北に高さ約１m長さ50m以上の土塁を設け、東西に２条の空濠を切る。井戸跡らしきものも中央近くに残る」との記載があり、その位置を示した略図が残されている（註３）。この分布調査の成果を取り入れた多賀城市内における館跡の研究も行われているが（註４）、現在ではそのいずれも確認することができない。

矢作ヶ館跡は古代の集落および中世の城館である。『留ヶ谷村風土記御用書出』（1774）に記載された古館の一つ「屋はきか館」に比定されている。北西部を対象とした第１次調査では遺構を発見することができなかったが、第３次調査では頂部平場を取り巻く空堀や土橋状の通路など館に関わる遺構を発見した。土塁積み土の下層には10世紀頃の土器を含む旧表土があり、その下層には竪穴住居跡など古代の遺構が存在することも明らかになった。

旧　名　称	新　名　称		備　　考
	野田遺跡	矢作ヶ館跡	
野田館跡	第１次		平成７年度調査
矢作ヶ館跡（第１次）	第２次	第１次	平成13年度調査
矢作ヶ館跡（第２次）	第３次	第２次	平成14年度調査
矢作ヶ館跡（第３次）		第３次	平成14年度調査

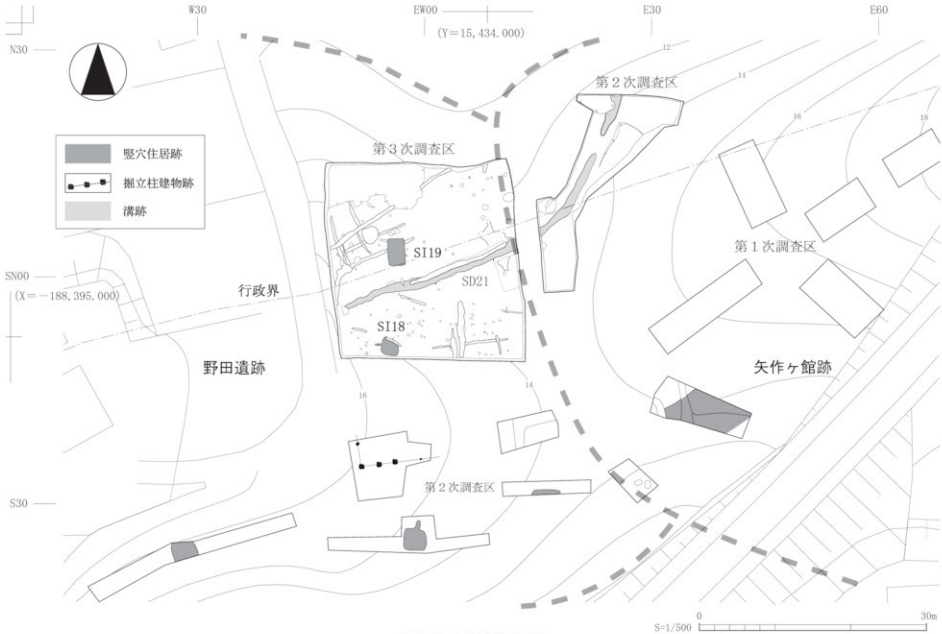
表１　遺跡名・調査次数新旧対応表

（註１）　この調査においては、発見した遺構の性格および分布調査時の所見などをふまえ、本遺跡の名称を「野田館跡」としたが、その後「野田遺跡」に復して今日に至っている。（多賀城市教育委員会『野田館跡』多賀城市文化財調査報告書第40集　1995）。

（註２）　この調査においては、野田遺跡・矢作ヶ館跡として登録している範囲および両者の間に位置する埋蔵文化財包蔵地外を対象として調査を行った。その報告では「矢作ヶ館跡第１次調査」の名称を用いたが（多賀城市教育委員会『西沢遺跡ほか－西沢遺跡第10次－・－山王遺跡第38次－・－新田遺跡第21次－・－矢作ヶ館跡第１次－』多賀城市文化財調査報告書第66集　2002）、その後包蔵地の範囲の検討を行って修正するに至った（多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成14年度－』2003）。そのため矢作ヶ館跡との間で遺跡名および調査次数について若干の混乱が生じたが、表１のように訂正しておきたい。

（註３）　多賀城市教育委員会『遺跡分布調査カード』1973

（註４）　加藤孝　野崎準「多賀城市内の館跡」『東北学院大学東北文化研究所紀要』２号　1973


W30
EW00
(Y=15,434.000)
E30
E60
N30
SN00
(X=−188,395.000)
S30
竪穴住居跡
掘立柱建物跡
溝跡
第３次調査区
第２次調査区
第１次調査区
SI19
SD21
SI18
行政界
野田遺跡
矢作ヶ館跡
S=1/500
0
30m

第３図　周辺遺構配置図

Ⅱ．調査に至る経緯と経過

今回の発掘調査は、平成13年８月に提出された当該区における宅地造成計画を契機とするものである。この計画は塩竈・多賀城両市にわたる約8,000㎡の範囲を対象とするもので、最深約10mの掘削を行うというものであり、その対象地区には野田遺跡および矢作ヶ館跡の二つの埋蔵文化財包蔵地が含まれることから、その対応をめぐって宮城県教育庁文化財保護課、塩竈市教育委員会生涯学習課、多賀城市教育委員会文化財課の三者で協議を行った。その後、９月には多賀城市埋蔵文化財調査センター、地権者、開発業者も加え、現地において協議を行った。両遺跡のうち、野田遺跡については小規模の発掘調査が実施されていたが（第１次調査）、遺跡の年代や遺構の分布状況など不明な点が多いことから、文化財保護課の指導を得て、10月に開発対象地内における遺構の有無の確認を目的とした確認調査を実施した（第２次調査）。

その結果、掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡４軒、溝跡５条等を発見し、古代を中心とする遺構の存在が明らかになった。この調査では、対象地区の内丘陵尾根線に近い南半部に遺構が多く分布しており、丘陵北斜面にあたる北半部では分布が希薄な状況であった。この調査結果をふまえ、開発業者側から北半部のみを対象とした造成計画が改めて提出されたことから、平成14年１月15日、３月８日、４月９日の３回にわたって各関係機関及び地権者・開発業者による協議が行われた。その結果、造成計画に先立って1,200㎡を対象とした発掘調査の実施が決定された。今回の調査については対象範囲が塩竈・多賀城両市に及ぶことから合同で実施することとなり、原因者側は塩竈・多賀城市と個別に委託契約を締結することとした。その後、３月29日に地権者より発掘承諾書の提出を受けて、４月11日より調査を開始した。

調査日誌抄

4.11　県文化財保護課職員の指導のもと、野田遺跡側に約25m四方の調査区を設定し、重機によって表土除去作業を開始した。西部から南部にかけては既に削平を受けていたことが明らかになる。

4.15　作業員を導入して遺構検出作業に着手し、竪穴住居跡２軒、溝跡、土壙等を発見した。

4.16　塩竈市建設部の協力を得て、平面図作成に必要な基準点の設定を行った。

4.18　検出した遺構の新しいものから埋土除去作業を行い、順次写真撮影と平面図・断面図を作成していった。

4.30　中央部で検出したＳＤ21が東側にさらにのびていることから、矢作ヶ館跡側に調査区を設定して確認したところ、一部途切れはするもののさらに調査区外に延びて行くことが判明した。なお、矢作ヶ館跡側ではそれ以外の遺構は検出できなかった。

5.12　発見した遺構について、おおよそ見解がまとまったことから全景写真撮影を行った。

5.14　ＳＫ41などの平面図作成後、発掘器材を撤収し、全ての調査を終了した。

Ⅲ．調　査　成　果

１．層序

今回の調査によって確認できた層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土。南側の高い部分では６～13㎝、北側の斜面では0.21～1.14mと厚く堆積している。

Ⅱ層：すべての遺構を覆うにぶい黄褐色砂質土。北側の斜面にのみ４～30㎝の厚さで堆積している。

Ⅲ層：北側の斜面において部分的にみられる明黄褐色土（断面では南北６ｍの範囲）。Ⅳ層上に直接堆積している。土質が地山に近似し、自然堆積とは見られないことから整地層の可能性もある。厚さは４～10㎝で、この上面がＳＤ21の検出面となっている。

Ⅳ層：北側の斜面でみられる褐色土。10世紀前葉の灰白色火山灰層（Ⅴ層）上に直接堆積しておりその上面がＳＫ40の検出面となっている。

Ⅴ層：10世紀前葉に降下した灰白色火山灰の自然堆積層。東壁際において東西約3.5m、南北約７ｍの範囲で検出した（東壁には及んでいないため断面図には示していない）。

Ⅵ層：岩盤上に堆積した堅く締まった黄褐色砂質土。南側の頂部付近をのぞく広い範囲に堆積。縄文時代の石鏃が出土しており、その時期の堆積層の可能性もある。これを含めて古代の基盤層（地山）と理解した。

２．発見遺構と遺物

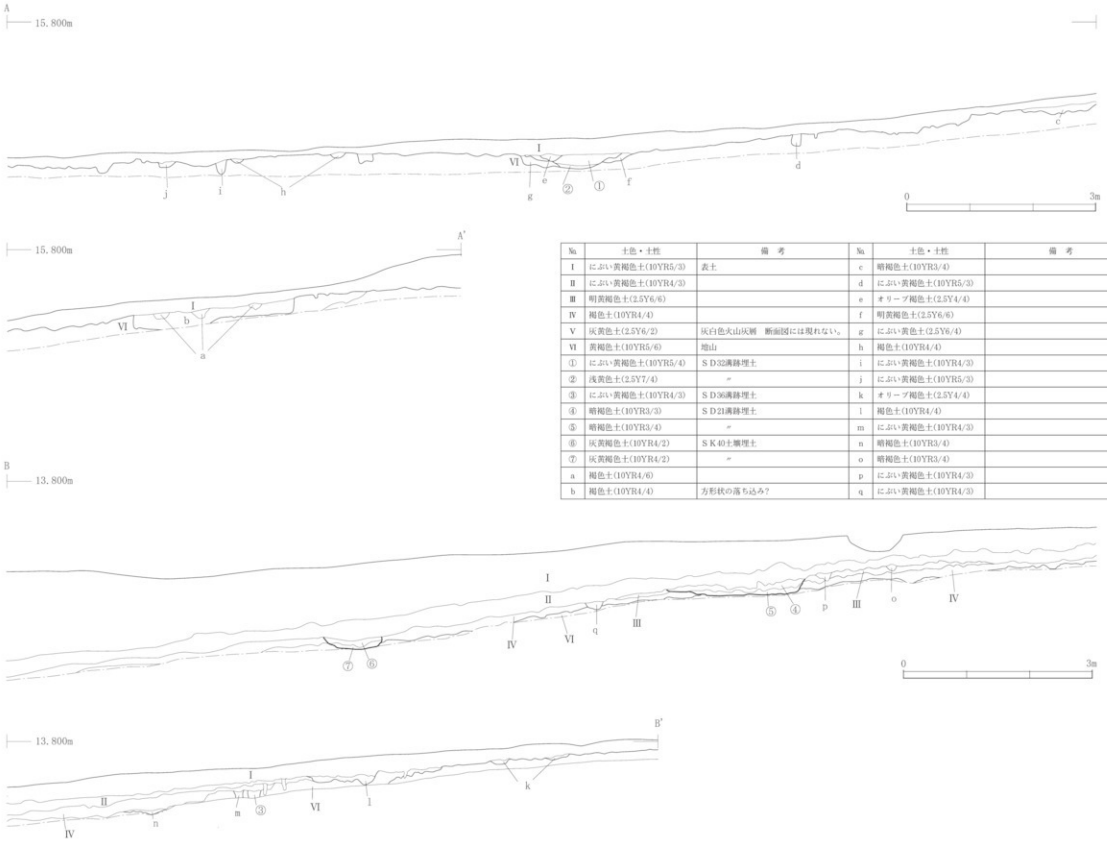
今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡２軒、溝跡17条、土壙５基、および少数の小Pitがある。これらのうちＳＤ21とＳＫ40をのぞく遺構はすべてⅥ層および岩盤上で検出したものである。

なお、遺構の中には両遺跡にまたがって検出したものもあるが、ほとんどの遺構は野田遺跡の範囲内で発見したものであり、以下特に断らない限りは野田遺跡側の調査区を指すものである。

ＳＩ18竪穴住居跡

南西部のⅥ層上面で発見した竪穴住居跡である。検出時、既に東辺付近では床面が露出しており、北辺と東辺の一部は削平により失われていた。ＳＤ29と重複しており、それより古い。平面形は方形であり、規模は西辺約2.4m、南辺約2.3mである。壁高は残存状況が良好な南辺付近で約20㎝である。方向は、南辺で見ると西で約11度北に偏している。床面は掘り込んだ地山面をそのまま利用し、貼床は確認できない。周溝は西・南辺と東辺の一部で検出した。規模は上幅11～16㎝、下幅４～８㎝、深さは３～５㎝である。埋土はしまりの強い黄褐色土である。カマドは西辺中央部に設けられており、煙道と側壁の一部が残存している。側壁は粘土を貼付けて構築しており、規模は前端幅40㎝、奥行70㎝である。煙道部は長さ1.05m、幅21～27㎝、深さ11～16㎝である。カマドおよび煙道内埋土は炭化物や焼土粒を含む褐色土であり、上部に拳大の焼土ブロックが混入している。住居内埋土は褐色土および黄褐色土が主体となっている。遺物は床面直上から非ロクロ調整の土師器杯、カマド内から非ロクロ調整の土師器甕が出土している。いずれも小破片である。

なお、本住居跡の床面に相当する位置において小Pit２基を検出した。いずれも本住居跡との関係が明確でなく、柱痕跡も確認できなかったことから住居には伴わない可能性が高い。

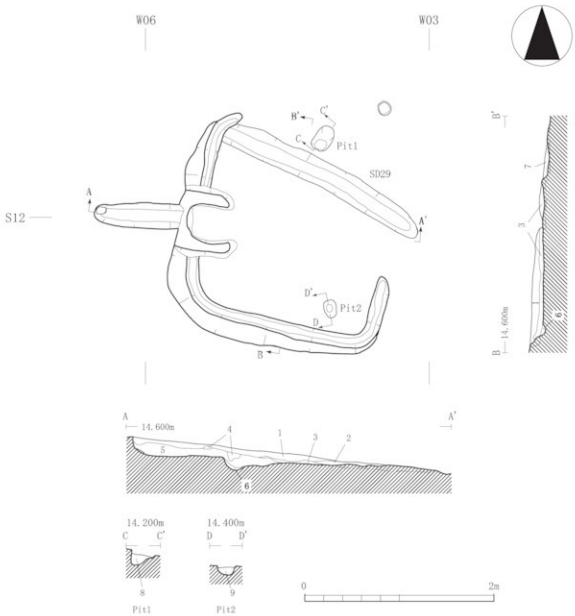


№　　土色・土性　　備　考			№　　土色・土性　　備　考		
Ⅰ	にぶい黄褐色土(10YR5/3)	表土	c	暗褐色土(10YR3/4)	
Ⅱ	にぶい黄褐色土(10YR4/3)		d	にぶい黄褐色土(10YR5/3)	
Ⅲ	明黄褐色土(2.5Y6/6)		e	オリーブ褐色土(2.5Y4/4)	
Ⅳ	褐色土(10YR4/4)		f	明黄褐色土(2.5Y6/6)	
Ⅴ	灰黄色土(2.5Y6/2)	灰白色火山灰層　断面図には現れない。	g	にぶい黄色土(2.5Y6/4)	
Ⅵ	黄褐色土(10YR5/6)	地山	h	褐色土(10YR4/4)	
①	にぶい黄褐色土(10YR5/4)	ＳＤ32溝跡埋土	i	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
②	浅黄色土(2.5Y7/4)	〃	j	にぶい黄褐色土(10YR5/3)	
③	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	ＳＤ36溝跡埋土	k	オリーブ褐色土(2.5Y4/4)	
④	暗褐色土(10YR3/3)	ＳＤ21溝跡埋土	l	褐色土(10YR4/4)	
⑤	暗褐色土(10YR3/4)	〃	m	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
⑥	灰黄褐色土(10YR4/2)	ＳＫ40土壙埋土	n	暗褐色土(10YR3/4)	
⑦	灰黄褐色土(10YR4/2)	〃	o	暗褐色土(10YR3/4)	
a	褐色土(10YR4/6)		p	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
b	褐色土(10YR4/4)	方形状の落ち込み?	q	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	

第４図　調査区南・東壁断面図

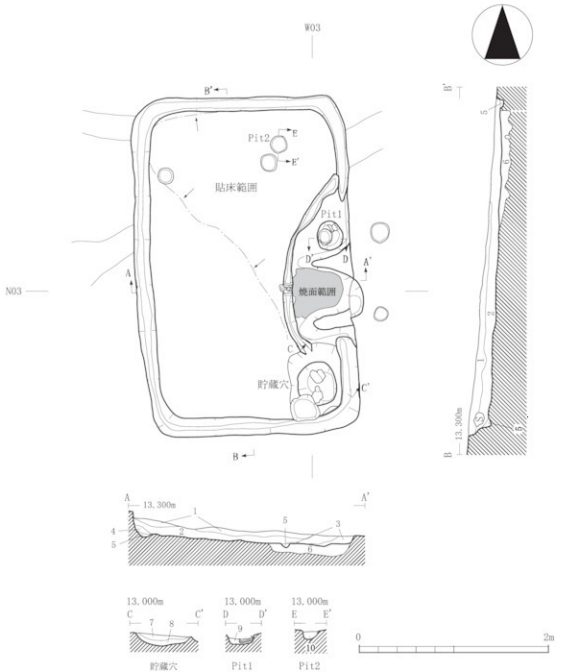
W12
W06
EW00
(Y＝15,434.000)
E06
E12
E18
E24
E30
N24
N18
N12
N06
SN00
(X＝－188,395.000)
S06
野田遺跡
矢作ヶ館跡
SD21
SD25
SD22
SD28
SK37
SD27
SD26
SD24
S119
SD23
SD20
SD21
SD31
SD33
SD32
SD34
SD35
SD36
SD30
SD29
S118
SK39
SK38
SK40
SK41
V層
Ⅳ層
A
A'
B
B'
0
10m

第５図　調査区全体図



No.	土色・土性	備　　考	No.	土色・土性	備　　考
1	褐色土(10YR4/6)		6	黄褐色土(10YR5/6)	周溝埋土
2	黄褐色土(10YR5/6)		7	にぶい黄褐色土(10YR5/4)	ＳＤ29溝跡埋土
3	褐色土(10YR4/6)		8	褐色土(10YR4/4)	Pit1埋土
4	明黄褐色土(5YR5/6)	焼土ブロック	9	褐色土(10YR4/6)	Pit2埋土
5	褐色土(10YR4/4)	炭化物・焼土粒を含む			

第６図　ＳＩ18竪穴住居跡平面図・断面図



No.	土色・土性	備　　考	No.	土色・土性	備　　考
1	褐色土(10YR4/4)	地山粒・炭化物粒を含む	6	黄褐色土(10YR5/6)	貼床埋土
2	暗褐色土(10YR3/4)	地山粒・炭化物粒を多く含む	7	褐色土(10YR4/4)	貯蔵穴埋土　地山粒・炭化物粒を含む
3	赤褐色土(2.5Y3/3)	炭化物粒・焼土粒・地山粒を含む	8	暗褐色土(10YR3/4)	貯蔵穴埋土　炭化物・焼土粒を含む
4	黄褐色土(10YR5/6)	壁崩壊土	9	褐色土(10YR4/4)	Pit1埋土
5	暗褐色土(10YR3/4)	周溝埋土　炭化物・焼土粒を含む	10	暗褐色土(10YR3/3)	Pit2埋土

第７図　ＳＩ19竪穴住居跡平面図・断面図

ＳＩ19竪穴住居跡

中央やや西寄りのⅥ層上面で発見した竪穴住居跡である。ＳＤ24と重複しており、それより古い。平面形は南北に長い長方形であり、規模は長辺約3.6m、短辺約3.0mであり、壁高は西辺付近では19～27㎝である。方向は、西辺で見ると北で約３度西に偏している。床面は、南東・北西隅を結んだラインの南西隅側では掘り込んだ地山面をそのまま利用しているが、北東隅側では地山粒と小礫を含む黄褐色土の貼床である（６層）。周溝は北東隅を除く各辺で検出した。規模は上幅８～17㎝、下幅３～11㎝、深さ４～５㎝である。カマドは東辺中央部のやや南側に設けられており、側壁と、煙道の基部にあたる小規模な段を検出した。側壁は粘土を貼付けて構築しており、規模は前端幅70㎝、奥行60㎝である。カマドの前面には東西55㎝、南北54㎝の範囲で焼面を確認した。その前面にはカマドと床面を区画するような小溝を検出した。東壁から焼面の西端を経て南東隅の貯蔵穴までのびている。規模は上幅３～11㎝、下幅３～５㎝、深さ４～５㎝であり、埋土は地山粒を含む暗褐色土である。貯蔵穴は床面南東隅で検出した。平面形は方形を呈し、規模は東西28㎝、南北31㎝、深さ11㎝である。埋土は２層に区分され、上層は地山ブロックや炭化物を含む褐色土、下層は炭化物や焼土粒を含む暗褐色土であり、住居内埋土２層と近似している。Pit１はカマドの北側で検出した小穴である。平面形は円形を呈し、規模は東西28㎝、南北31㎝、深さ９㎝である。埋土は地山細粒を含む褐色土であり、底面のやや上から須恵器杯２個体が入子の状態で出土した。住居内埋土は２層に区分され、上層は褐色土、下層は暗褐色土である。いずれも層中に地山粒や炭化物粒を含んでいる。遺物は、カマド内から非ロクロ調整の土師器杯・甕・甑（第８図４）、貯蔵穴から非ロクロ調整の土師器鉢（第８図３）が出土している。土師器は他の破片資料も含めすべてロクロを使用していないものである。甑は体部外面にハケメ調整を施し、下端のみ手持ちヘラケズリによってさらに調整を加えたものである。鉢は口縁部が欠損しているが土師器長胴甕の下半部のような器形を呈するものである。全体に磨耗が著しいが、口縁部をヨコナデし、体部は指頭などによるオサエによって粗雑に仕上げている。須恵器杯（第８図１・２）はいずれもロクロからの切り離しは不明であるが、底部全面に手持ちヘラケズリを施したものである。また堆積土から石鏃（第８図５）が出土している。

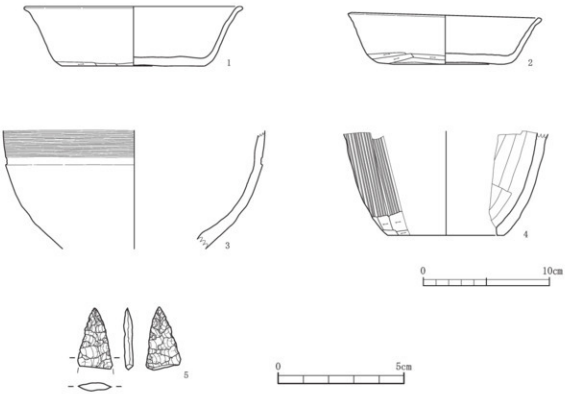
なお、北壁付近で小Pitを３基検出した。平面形が円形を呈し、規模は直径12㎝、深さ８㎝で、埋土は地山細粒や地山ブロックを含む明黄褐色土である。いずれも住居内埋土に覆われ、床面上で検出したものであるが、柱痕跡は確認できず、位置的にも上屋を支えるものとは考えがたい。

ＳＤ20溝跡

東西方向に延びる溝跡である。ＳＤ21の埋土上面で検出し、一部でⅢ層を切っている状況も確認した。検出した長さは約14mであり、方向は東で約23度北に偏している。規模は上幅38～73㎝、下幅18～34㎝、深さは６～11㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がっており、底面は多少凹凸がある。埋土は炭化物を多く含む暗褐色土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付杯が出土している。

ＳＤ21溝跡

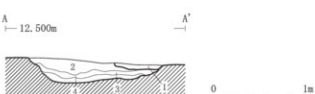
野田遺跡から矢作ヶ館跡にかけて発見した溝跡である。野田遺跡側では東西方向に直線的にのびているが、矢作ヶ館跡側では北側に屈曲して南北方向に延びている。Ⅲ層上面で検出し、Ⅱ層によって覆われている状況を確認した。埋没後、その埋土を切ってＳＤ20が掘り込まれている。検出した長さは約46mであるが、さらに北側にのびている。方向は、野田遺跡側では東で約20度北に、矢作ヶ館跡側では北で約30度



単位：cm

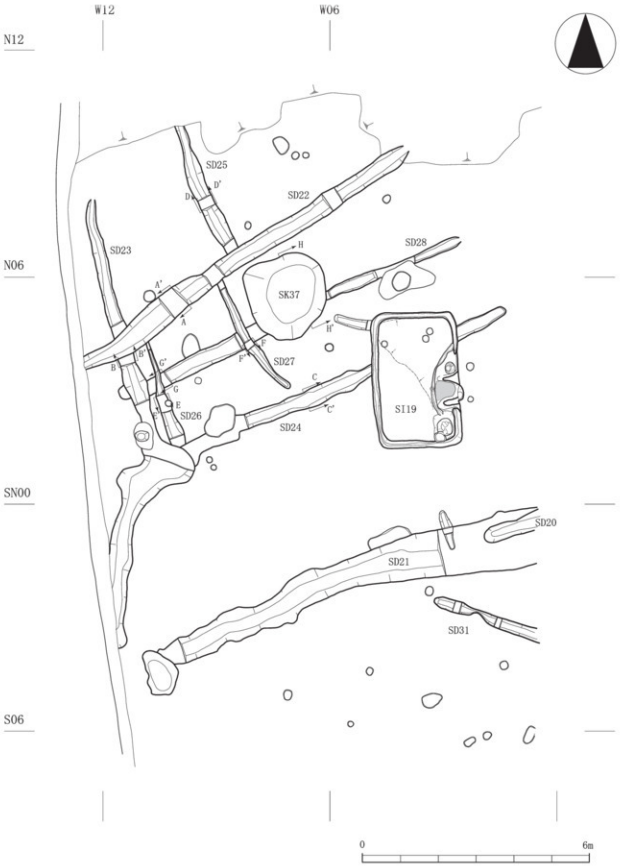
番号	種　類	遺構・層位	特　徴		口　径 残存率	底　径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	須恵器・杯	SI19Pit1・1層	ロクロナデ 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(17.2) 7/24	11.3 24/24	4.7	4－1	R 1	Ⅱ類
2	須恵器・杯	SI19Pit1・1層	ロクロ 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	15.3 17/24	10.6 24/24	4.1	4－2	R 2	Ⅱ類
3	土師器・鉢	SI19貯蔵穴内・1層	ヨコナデ						R10	
4	土師器・甕	SI19カマド内・1層	ハケメ 手持ちヘラケズリ			(9.2) 5/24		4－3 a 4－3 b	R 5	
5	石鏃	SI19・1層	石材　珪質頁岩　法量　長：2.4　幅：1.4　厚：0.4　重：0.9g					4－7	R 6	基部欠損

第 8 図　ＳＩ19竪穴住居跡出土遺物

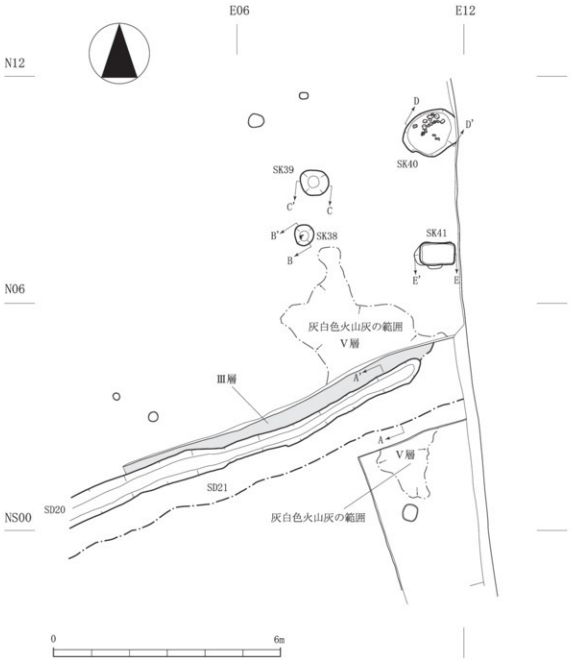


SD20・21溝跡		
No.	土色・土性	備　　考
1	暗褐色土(10YR3/4)	SD20溝跡埋土　炭化物を多く含む
2	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	SD21溝跡埋土
3	灰黄褐色土(10YR4/2)	〃　　地山ブロックをわずかに含む。
4	灰黄褐色土(10YR4/2)	〃　　地山ブロックを多く含む。

第 9 図　ＳＤ20・21溝跡断面図

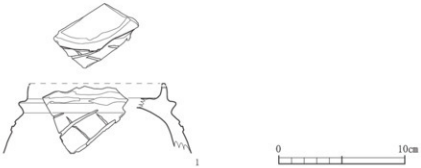


第10図　調査区北西部検出遺構平面図



第11図　調査区北東部検出遺構平面図

東に偏している。規模は上幅0.61～1.58m、下幅19～91cm、深さは９～31cmである。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面には凹凸がある。埋土は３層に区分され、１層はにぶい黄褐色土、２・３層は地山ブロックを含む灰黄褐色土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶・蓋、須恵系土器杯・高台付杯、円面硯（第12図１）、礫などが出土している。土師器、須恵器、須恵系土器は破片数で約360点あるが、いずれも細片であり、しかも磨耗している。

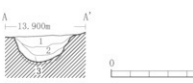


番号	種　類	遺構・層位	特　徴		口　径 残存率	底　径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	円面硯	SD21・1層	ロクロナデ	ロクロナデ				4－5	R 4	

第12図　ＳＤ21溝跡出土遺物

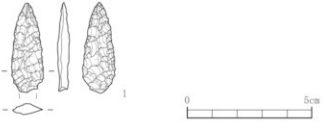
ＳＤ22溝跡

西壁から北壁にかけてのⅥ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ23・25・26・27溝跡と重複しており、それらより新しい。一部後世の掘削によって途切れているが約19m検出し、さらに調査区外にのびている。方向は東で約33度北に偏している。規模は上幅43～74cm、下幅14～41cm、深さ６～27cmである。壁は底面から垂直気味に立ち上がっており、断面形はＵ字状を呈している。埋土は３層に区分され、１層は地山ブロックを多く含む暗褐色土、２・３層は地山粒や地山ブロックを含むオリーブ褐色土である。遺物は土師器杯・高台付杯・甕・蓋、須恵系土器高台付杯、石鏃（第14図１）が出土している。



SD22溝跡		
No.	土色・土性	備　考
1	暗褐色土(10YR3/4)	地山ブロックを多く含む
2	オリーブ褐色土(2.5Y4/6)	地山粒を含む
3	オリーブ褐色土(2.5Y4/6)	地山ブロック、礫を含む。

第13図　ＳＤ22溝跡断面図



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	石材	法　量				写真図版	登録番号	備　考
				長さ	幅	厚さ	重さ			
1	石鏃	SD22・1層	珪質頁岩	3.5	1.3	0.4	1.8g	4－6	R 9	基部欠損

第14図　ＳＤ22出土遺物

ＳＤ23溝跡

西壁際のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ22・24・26・28と重複しており、ＳＤ22より古く、ＳＤ24・26・28より新しい。北半部は直線的であるが、南半部はＳＤ24と重複する部分でふくらみ、西側にやや湾曲してのびている。検出した長さは約10mである。方向は、直線的な北半部でみると北で約14度西に偏している。規模は、北半部では上幅25～47㎝、下幅12～23㎝、深さ3～10㎝であり、南半部では上幅0.47～1.1m、下幅0.18～0.49m、深さは３～12㎝である。壁は北半部では底面より垂直気味に立ち上がっているが、南半部では緩やかに立ち上がっている。底面はいずれも凹凸がなく、北側から南側に傾斜している。埋土は地山粒を含む褐色土である。遺物は出土していない。

SD23溝跡

№	土色・土性	備　　考
1	褐色土(10YR4/4)	地山粒を含む。

第15図　SD23溝跡断面図

ＳＤ24溝跡

西北部のⅥ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＩ19、ＳＤ23・26と重複しており、ＳＤ23より古く、ＳＩ19、ＳＤ26より新しい。直線的にのびており、検出した長さは約9.2mである。方向は東で約25度北に偏している。規模は上幅26～62㎝、下幅19～32㎝、深さ６㎝である。壁の立ち上がりは、北側ではほぼ垂直であるが、南側は緩やかである。底面は凹凸がなく、西側から東側へ傾斜している。埋土は地山ブロックを含む褐色土である。遺物は須恵器甕が出土している。

SD24溝跡

№	土色・土性	備　　考
1	褐色土(10YR4/4)	地山ブロックを含む。

第16図　SD24溝跡断面図

ＳＤ25溝跡

北西部のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。南端部はそれより新しいＳＤ22の南側にはのびておらず、北側は後世の掘削により失われているため、検出した長さは約3.6mである。方向は北で約23度西に偏している。規模は上幅21～46㎝、下幅14～17㎝、深さ10㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸がなく、南側から北側に傾斜している。埋土は地山ブロックや小礫を含む褐色土である。遺物は須恵器瓶、須恵系土器杯が出土している。

SD25溝跡

№	土色・土性	備　　考
1	褐色土(10YR4/4)	地山ブロック、小礫を含む。

第17図　SD25溝跡断面図

ＳＤ26溝跡

北西部のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ22・23・24・28と重複しており、ＳＤ22・23より古く、ＳＤ24・28より新しい。方向は北で約17度西に偏している。検出した長さはＳＤ22とＳＤ24にはさまれた約2.9mであり、規模は、上幅７～43㎝、下幅４～25㎝、深さは３～５㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸がなく、北側から南側に傾斜している。埋土は地山粒を含む褐色土である。遺物は出土していない。

SD26溝跡

№	土色・土性	備　　考
1	褐色土(10YR4/4)	地山粒を含む。

第18図　SD26溝跡断面図

ＳＤ27溝跡

北西部のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ22・28と重複しており、ＳＤ22より古く、ＳＤ28より新しい。方向は北で約33度西に偏している。検出した長さは約3.4mであり、規模は上幅10～25㎝、下幅４～10m、深さ５㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸がなく、北側から南側に傾斜している。埋土は地山ブロックを含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

SD27溝跡

№	土色・土性	備　　考
1	黄褐色土(2.5Y5/4)	地山ブロックを含む。

第19図　SD27溝跡断面図

ＳＤ28溝跡

北西部のⅥ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ23・26・27、ＳＫ37と重複し、それらより古い。方向は東で約25度北に偏している。検出した長さは約9.2mであり、規模は上幅19～46㎝、下幅９～39㎝、深さは４㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土は地山粒を含むオリーブ褐色土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯が出土している。

SD28溝跡

№	土色・土性	備　　考
1	オリーブ褐色土(2.5Y4/6)	地山粒を含む。

第20図　SD28溝跡断面図

ＳＤ29溝跡

南西部のⅥ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＩ18と重複しており、それより新しい。長さは約2.5mの小規模な溝であり、方向は西で約27度北に偏している。規模は上幅23～30㎝、下幅11～13㎝、深さ４～６㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ30溝跡

南西部のⅥ層（岩盤）上面で発見した東西方向の溝跡である。長さは約２mの小規模な溝であり、方向は西で約14度北に偏している。規模は上幅23～26㎝、下幅10～14㎝、深さ２～４㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ31溝跡

南西部のⅥ層（岩盤）上面で発見した東西方向の溝跡である。長さは約3.6mであり、方向は西で約14度北に偏している。規模は上幅29～35㎝、下幅11～15㎝、深さ７～10㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ32溝跡

南東部のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ34と重複しそれより新しい。長さは約4.2mであり、方向はほぼ発掘基準線に一致している。規模は上幅0.2～1.4m、下幅22～43㎝、深さ２～23㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土は２層に区分される。上層は地山粒を多く含むにぶい黄褐色土、下層は粘性のある浅黄色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ33溝跡

南東部のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ34と重複しそれより新しい。長さは約7.4mであり、方向はほぼ発掘基準線に一致している。規模は上幅52～97㎝、下幅21～45㎝、深さ９㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ34溝跡

Ａ区南東部のⅥ層上面で発見した東西方向の溝跡である。溝はＳＤ32・33の間で途切れるが、一連の遺構と見られる。ＳＤ32・33・35と重複しそれらより古い。長さは約10.1mであり、方向は東で約６度北に偏している。規模は上幅10～37㎝、下幅６～18㎝、深さ４～９㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はオリーブ褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ35溝跡

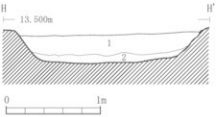
南東部のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ34と重複しそれより古い。長さは約2.6mであり、方向は北で約14度西に偏している。規模は上幅18～33㎝、下幅23㎝、深さ４㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ36溝跡

南東部のⅥ層上面で発見した東西方向の溝跡である。長さは約2.8mであり、方向はほぼ発掘基準線に一致している。規模は上幅21㎝、下幅16㎝、深さ11㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＫ37土壙

北西部のⅥ層上面で発見した土壙である。ＳＤ28と重複しており、それより新しい。平面形はおおよそ円形を呈しており、規模は直径約2.1m、深さ35㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土は２層に区分され、上層は地山ブロックを含む褐色土、下層は炭化物粒をわずかに含む褐色土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、須恵系土器杯、平瓦が出土している。



SK37土壙		
No.	土色・土性	備　　考
1	褐色土(10YR4/4)	１～２㎝大の地山ブロックを含む。
2	褐色土(10YR4/6)	炭化物粒をわずかに含む。

第21図　SK37土壙断面図

ＳＫ38土壙

北東部のⅥ層上面で発見した土壙である。平面形はおおよそ円形を呈し、規模は直径約55㎝、深さ10㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。埋土はにぶい黄橙色土である。遺物は須恵系土器杯（第23図１）が出土している。

SK38土壙		
No.	土色・土性	備　　考
1	にぶい黄橙色土(10YR7/3)	

第22図　SK38土壙断面図

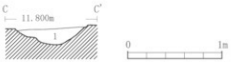
単位：cm

番号	種　類	遺構・層位	特　徴		口　径 残存率	底　径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	須恵系土器・杯	SK38・１層	ロクロナデ	ロクロナデ	14.0 24/24	5.0 24/24	4.3	4－4	R３	

第23図　SK38土壙出土遺物

ＳＫ39土壙

北東部のⅥ層上面で発見した土壙である。平面形は東西にやや長い楕円形であり、規模は長径76㎝、短径66㎝、深さ19㎝である。壁は底面より緩やかに立ち上がっており、底面には多少凹凸がある。埋土は黄褐色粘土である。遺物は出土していない。

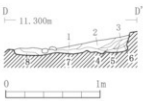


SK39土壙		
№	土色・土性	備　　考
1	にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)	

第24図　SK39土壙断面図

ＳＫ40土壙

北東部で発見した土壙である。Ⅳ層上面で検出し、Ⅱ層によって覆われている。北東隅はわずかに調査区外に延びている。平面形はおおよそ方形であり、規模は長軸方向で1.3m、短軸方向で1.5m、深さ19cmである。壁は底面より垂直に立ち上がっており、底面には凹凸がある。埋土は８層に区分されるが、にぶい黄褐色粘土（１・４・６層）と灰黄褐色土（７・８層）が主体となっており、にぶい黄褐色粘土の間には灰褐色粘土、褐色土、灰黄褐色土の薄層が堆積している。埋土の上層（１～２層）には直径５～20cm大の自然石が多数混入している。遺物は、丸瓦（ⅡＢ類）、砥石などが出土している。

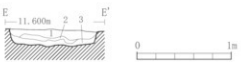


SK40土壙					
№	土色・土性	備　　考	№	土色・土性	備　　考
1	にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)		5	褐色粘土(10YR4/4)	砂質に富む。
2	灰褐色粘土(7.5YR4/2)		6	にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)	砂質に富む。
3	にぶい暗褐色土(10YR5/3)		7	灰黄褐色土(10YR4/2)	
4	にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)	砂質に富む。	8	灰黄褐色土(10YR4/2)	

第25図　SK40土壙断面図

ＳＫ41土壙

北東部で発見した土壙である。Ⅳ層上面で検出し、Ⅱ層によって覆われている。平面形はおおよそ方形を呈し、規模は長辺93cm、短辺48cm、深さ17cmである。壁は底面より垂直に立ち上がっており、底面には凹凸がある。東壁の一部は熱を受け赤く変色している。埋土は３層に区分され、上層（１・２層）はにぶい黄褐色土と灰黄褐色粘土、下層（３層）は多量の炭化物を含む黒色土である。遺物は出土していない。



SK41土壙		
№	土色・土性	備　　考
1	にぶい黄橙色土(10YR6/3)	
2	灰黄褐色粘土(10YR5/2)	
3	黒色土(10YR1.7/1)	多量の炭化物を含む。

第26図　SK41土壙断面図

3．堆積層出土遺物

各堆積層からは土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯・高台付杯、石鏃（第27図１・２）が出土している。土器は全体的に磨耗しているものが多い。第27図１・２は縄文時代の石鏃である。２は古代の基盤層としたⅥ層から出土したものである。

単位：cm

番号	種類	層位	石材	法量				写真図版	登録番号	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ			
1	石鏃	Ⅰ層	珪質頁岩	1.6	1.0	0.3	0.4 g	4－8	R 8	基部欠損
2	石鏃	Ⅵ層	玉髄	1.9	1.4	0.4	0.5 g	4－9	R 7	基部欠損

第27図　堆積層出土遺物

Ⅳ．遺構の年代

今回の調査で発見した遺構には竪穴住居跡２軒、溝跡17条、土壙５基がある。以下、各遺構の年代について検討する。

竪穴住居跡

ＳＩ19はカマド内の崩壊土より土師器甑、貯蔵穴より土師器鉢、カマド脇のPit１より須恵器杯２点が出土している。これらが廃棄され、埋没するに至るまでには微妙な時間差が存在した可能性もあるが、カマド内の崩壊土と貯蔵穴、Pit１のいずれもが床面上に堆積した住居内埋土２層によって直接覆われており、住居廃絶時に近い年代の遺物として捉えることができよう。

須恵器杯２点はいずれも底部が平底であり、口径を１としたときの底径の割合が0.8前後と大きい。ロクロからの切り離しの後、底部全面に手持ちヘラケズリを施しており、切り離しの痕跡は完全に失われている。器形および調整手法が類似するものとして多賀城創建期の瓦や須恵器を焼成した色麻町の日の出山窯跡群Ｃ地点出土資料がある（註１）。同資料は第Ⅰ～Ⅲ群に分類されており、ＳＩ19出土資料の底口比（第８図1－1：1.52、第８図2－1：1.44）と口高比（第８図1－1：3.66、第８図2－1：3.73）の値は第Ⅰ～Ⅲ群土器における法量分布内に収まるものである。器形についても、ＳＩ19出土資料にみられるように体部が外反する器形は第Ⅰ群土器の特徴とされているものである。また、ロクロからの切り離しの後、底部を手持ちヘラケズリによって再調整する手法は第Ⅰ～Ⅲ群土器にみられるが、ＳＩ19出土資料のように底部全体にわたってヘラケズリを行うのは第Ⅰ・Ⅱ群土器の特徴であり、底部周縁から体部下端にとどまって底部中央に切り離しの痕跡を明瞭にとどめる第Ⅲ群土器とは大きく異なっている。このように、ＳＩ19出土資料は器形的には第Ⅰ群土器に類似し、調整手法は第Ⅰ・Ⅱ群土器と共通しているように、第Ⅰ群土器との共通点が最も多い。第Ⅰ群土器の年代は「養老・神亀年間（717～728）以前の８世紀初頭頃」と考えられており、多賀城創建期でも古い段階に位置づけられるものである。ＳＩ19出土資料についても同様

の年代が想定できる。

土師器鉢は口縁部が欠損しているが、内湾する体部と厚い底部からなり、口縁部と体部の境には明瞭な沈線が巡らされている。調整については、口縁部はヨコナデされているが、体部は成形時の手や指の圧痕がそのまま残るような粗雑な部分を多く残す粗製の鉢である。器形的に一致する資料は確認していないが、山王遺跡第10次調査におけるＳＤ180Ａ溝跡出土資料（註２）の中に類似するものがある（第28図）。

第28図　ＳＤ180Ａ溝跡出土遺物（参考）

ＳＤ180Ａ溝跡出土資料と同様の特徴を持つ土師器杯は山王遺跡ＳＫ5422（第17次調査）から出土しており、８世紀前葉頃のもので、実年代の一端が養老５年（721）前後にあることが明らかになっている（註３）。またＳＤ180Ｂ溝跡からは、SD180Ａより型式的に新しい土師器杯に天平宝字７年（763）の具注歴（漆紙文書）が供伴しており（註４）、下層の土器群の下限年代を明確に示している。したがって、ＳＤ180Ａ溝跡出土資料の年代は８世紀前葉以降、天平宝字７年（763）以前であり、土師器鉢についてもその年代のものと考えることができる。

土師器甑は体部から底部にかけての破片資料である。単孔・多孔のいずれか判断できない。外面はハケメ調整され、下端部のみ手持ちヘラケズリで調整している。土師器甑における外面のハケメ調整は、多賀城周辺では８世紀前半頃に多く見られる手法である。

以上のことから、ＳⅠ19出土資料の年代は、資料的に良好な須恵器杯の年代観を重視すれば養老・神亀年間（717～728）以前の８世紀初頭頃となり、おおよそ多賀城創建期の古い段階の遺構と理解できよう。土師器鉢・甑の年代も矛盾するものではない。

ＳⅠ18については、非ロクロ調整の土師器杯・甕が出土していることからおおよそ８世紀代と見ておきたい。

溝　跡

ＳＤ21は、灰白色火山灰層を直接覆うⅣ層よりさらに新しいⅢ層上面で検出していることから10世紀前葉以降のものであり、ＳＤ20はそれよりさらに新しい時期のものである。ＳＤ22・25・28は出土遺物に須恵系土器が含まれており、ＳＤ23・24はＳＤ28よりも新しいことから、10世紀前葉以降のものであることが明らかである（註５）。しかし、下限年代については手がかりがなく、10世紀前葉以降どの時代まで新しくなるのかは不明である。これらの溝跡の埋土はいずれも褐色土や黒褐色土を主体とするものであり、Ⅱ・Ⅳ層など10世紀前葉以降の堆積層に近似した特徴を持っていることから、年代的にはそれらとさほど隔たりがない時期の遺構である可能性があろう。

土　壙

ＳＫ38は須恵系土器杯が完全な状態で出土していることから10世紀前葉頃の年代が考えられる。ＳＫ40

からは丸瓦（ⅡＢ類）と砥石が出土しているのみであり、ＳＫ39・41からは出土遺物がないため、年代を特定することはできない。ＳＫ37からは土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、須恵系土器杯、平瓦などの破片が出土している。これらの埋土についてみると、ＳＫ37は10世紀前葉以降下限を明確にしえない溝跡と近似し、にぶい黄褐色やにぶい黄橙色など基盤層のブロックや粒等を多く含むＳＫ38・39・40・41とは明確に異なっている。このような特徴に注目するならば、年代を明らかにしえないＳＫ39・40・41については溝跡やＳＫ37よりは古い年代を想定することも可能であり、ＳＫ38と同じ頃の年代を考えておきたい。

最後にこれらの分布状況と性格について簡単に触れておきたい。これらの遺構は野田遺跡の東部から矢作ヶ館跡の西部にかけて検出したものである。野田遺跡第２次調査および矢作ヶ館跡第１次調査では今回の調査の南側において掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡などの存在を確認しており、しかもより密度の濃い分布状況を示している。一方東側の矢作ヶ館跡側ではほとんど遺構が発見できなかったことから、掘立柱建物跡や竪穴住居跡で構成される遺構群は調査区南側の丘陵緩斜面に多く存在する可能性が高いと考えられる。このような遺構群の性格については、資料が少ない現時点において明確にすることはできないが、丘陵上に掘立柱建物跡や竪穴住居跡が点在する様子から、多賀城と同時代の集落の一部である可能性が考えられよう。

（註１）　色麻町教育委員会『日の出山窯跡群―詳細分布調査とＣ地点西部の発掘調査―』色麻町文化財調査報告書第１集　1993

（註２）　多賀城市埋蔵文化財調査センター　建設省東北地方建設局仙台工事事務所『山王遺跡―第10次発掘調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）―』多賀城市文化財調査報告書第27集　1991

（註３）　多賀城市教育委員会『山王遺跡―第17次調査―出土の漆紙文書』多賀城市文化財調査報告書第39集　1995

（註４）　多賀城市埋蔵文化財調査センター　建設省東北地方建設局仙台工事事務所『山王遺跡―第12次発掘調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）―』多賀城市文化財調査報告書第30集　1992。ただし、本書ではＳＤ180ＡをSD180溝跡下層、SD180ＢをSD180溝跡上層と表記している。

（註５）　宮城県教育委員会　宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　政庁跡　本文編』　1982
その後多賀城跡第61次調査において年代観の修正が行われているが（宮城県多賀城跡調査研究所「第61次調査」『多賀城跡調査研究所年報1991』1992）、多賀城市教育委員会では政庁跡における見解に従っている。

Ⅴ．ま　と　め

1　野田遺跡の東部から矢作ヶ館跡の西部にかけて竪穴住居跡２軒、溝跡17条、土壙５基を発見した。

2　調査区内の遺構は竪穴住居跡、土壙、溝跡の順に変遷している。竪穴住居跡の１軒は８世紀初頭、他１軒は８世紀代、土壙の１基は10世紀前葉頃、溝跡は10世紀前葉以降の年代が考えられる。

3　遺構は丘陵の尾根から南斜面にも広がっている可能性が高く、多賀城と同時代の集落の一部と考えられる。

4　出土遺物中に縄文時代の石鏃が４点あり、本調査区周辺に当該期の遺構が存在する可能性も考えられる。

1．昭和36年（1961）当時の調査区周辺の様子

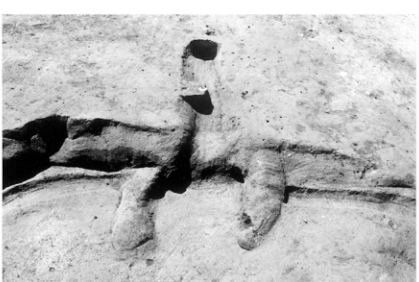
この写真は、国土地理院長の承諾を得て、同院撮影の空中写真を複製したものです。
（承認番号平成16東複第197号）

2．調査区全景　北東より

写真図版1

3．調査区全景　東より

4．ＳＩ18竪穴住居跡完掘状況
東より



5．ＳＩ18竪穴住居跡カマド部分
東より

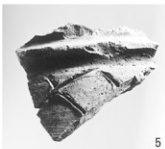
写真図版２

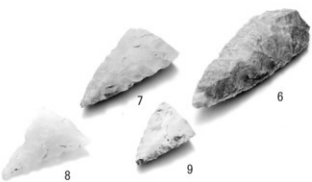
6．ＳＩ19竪穴住居跡完掘状況
西より

7．ＳＩ19竪穴住居跡Pit１遺物
出土状況　　西より

8．ＳＤ20・21溝跡土層断面
東より

写真図版３





1　　ＳＩ19竪穴住居跡Pit１出土遺物　須恵器杯　第８図１Ｒ１
2　　ＳＩ19竪穴住居跡Pit１出土遺物　須恵器杯　第８図２Ｒ２
3ａ　ＳＩ19竪穴住居跡カマド内出土遺物　土師器甑（外面）　第８図４Ｒ５
3ｂ　ＳＩ19竪穴住居跡カマド内出土遺物　土師器甑（内面）　第８図４Ｒ５
4　　ＳＫ38土壙出土遺物　須恵系土器杯　第23図１Ｒ３
5　　ＳＤ21溝跡出土遺物　円面硯　第12図１Ｒ４
6　　ＳＤ22溝跡出土遺物　石鏃　第14図１Ｒ９
7　　ＳＩ19竪穴住居跡埋土出土遺物　石鏃　第８図５Ｒ６
8　　Ⅰ層出土遺物　石鏃　第27図１Ｒ８
9　　Ⅵ層出土遺物　石鏃　第27図２Ｒ７

写真図版４

報告書抄録

ふりがな	のだいせき　やはぎがたてあと
書名	野田遺跡　　矢作ヶ館跡
副書名	
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書　　塩竈市文化財調査報告書
シリーズ番号	第79集　　第７集
編著者名	石川　俊英
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番１号　TEL022-368-0134 〒985-0036　宮城県塩竈市東玉川町９番１号　TEL022-362-2556
発行年月日	西暦2005年３月31日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
野田遺跡(のだいせき) (第３次調査)	宮城県(みやぎけん) 多賀城市(たがじょうし) 留ヶ谷(とめがや)二丁目 25-1、27-1	042099	18023	38度 17分 51秒	141度 00分 38秒	20020411 ～ 20020514	900㎡	宅地造成
矢作ヶ館跡(やはぎがたてあと) (第２次調査)	宮城県(みやぎけん) 塩竈市(しおがまし) 袖野田(そのだ)地内		18029					

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野田遺跡 (第３次調査)	集落	奈良・平安	竪穴住居 溝、土壙	土師器、須恵器、 須恵系土器、円面硯	
矢作ヶ館跡 (第２次調査)	集落 城館	古代・中世	溝		

多賀城市文化財調査報告書第79集
塩竈市文化財調査報告書第７集

野　田　遺　跡
矢作ヶ館跡

平成17年３月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話（０２２）３６８－０１３４
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
電話（０２２）３６８－１１４１
塩竈市教育委員会
宮城県塩竈市本町８番１号
電話（０２２）３６２－７７４４
印刷　有限会社　工陽　社
宮城県塩竈市尾島町８番７号
電話（０２２）３６５－１１５１

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています
SOY INK 印刷には大豆油インキを使用しています